

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会

会長 竹之下 洲一

編集者 広報部 玉利 良一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498 始良市歴史民俗資料館 0995 (65) 1553

「西郷どん」の城山帰還路の足跡を訪ねるイベント開催

竹之内 茂



高松坂を踏破

平成30年11月10日(土)、「西郷どん」が通った城山への帰還路の足跡を訪ねる」イベントを開催しました。NHK大河ドラマの放送で「西郷どん」ブームが盛り上がる中、参加者は西郷隆盛一行が通った古道を歩いたり、帰還路沿いにある西郷どん関連の史跡や伝統芸能に触れたりしました。

明治10(1877)年8月31日、西南戦争で敗走し、城山に帰還する西郷軍は溝辺の竹山にある高松坂を西に下りました。この道は高松

城址の中を通り、今も昔の状態が残っている古道で、141年前を偲びながら歩きました。加治木の辺川市野まで歩き、西別府の嶽集落では島津義弘以来、400年以上伝承されている県指定無形民俗文化財の吉左右踊りの保存会々長から、貴重なお話と唄を聞きました。始良の山田麓の瀬戸山宅にある西郷隆盛の腰掛石、蒲生で西郷どんが休息した川東の富田治兵衛宅跡を訪ねました。西郷隆盛が宿営した町馬場の澗上久右衛門宅跡では、給仕にあたったと言われる厚地太吉の子孫の方から、当時のお話や作家の司馬遼太郎が澗上宅を訪れた時の話を聞きました。次に、9月1日の未明に鹿児島の城山を目指す西郷軍一行が渡った、川崎の渡し場に行きました。辺見十郎太が率いる抜刀隊が、8月31日の蒲生突破作戦で官軍に勝利した佐山峠の戦いを歌った、地元に残る稚児唄が披露されました。



吉左右踊保存会
榎木会長

「佐山峠の戦いを歌った稚児唄」

「七月二十三日は佐山破れ 川路新吾どんな 草鞋片一方そびっかけて
辺見どんな馬から 西郷どんな駕籠から 桐野利秋や進めラッパで
行っきゃい 行っきゃい ドンドン 正々堂々 正堂々」

*旧暦7月23日は、新暦では8月31日にあたります。

*川路新吾は、政府の川路利良と西郷信吾を皮肉って付けられたものと考えられます。

西南戦争悲話2題

橘木 雅晴

瀬戸山才蔵の辞世の句

明治10年(1877)8月31日午後、山田に到着した西郷一行は下名新馬場の瀬戸山家で休憩しました。前庭に疲れた西郷が腰掛けたという石が「西郷腰掛石」として保存されています。



瀬戸山家より西南戦争に出陣した瀬戸山才蔵という青年の書置きが、

最近歴史民俗資料館に寄託され展示されました。その文の始めに西郷と桐野の名を誇らしげに挙げ、私学校に志願入校が許可されて出陣する旨の後に、家族に宛てた辞世の句が記されています。意識すると「旧暦の12月大晦日の夕暮れ時、明るく日は家族にとって目出度い正月であるけれども、自分の出陣によって曇り模様になるかもしれない」と書かれています。

この句は新暦の2月12日に詠まれ、山田隊は2月15日に加治木から出陣しています。才蔵は薩軍第7大隊3番小隊の伍長として従軍しましたが、3月に激戦の田原坂で25歳の若さで戦死しています。西郷一行がこの家に立ち寄ったのは偶然ではなく、私学校徒であり田原坂での戦死者宅と確認した上でのことと思われます。

福重福右衛門の悲劇

一方山田川左岸の下名寺脇には、8月31日西郷一行に捕えられ、悲運の死を遂げた福重福右衛門の邸宅が残っています。福右衛門は幕末のころ山田郷福重門の名頭を務めた家で、樋ノ間で繋がった二つ家の頑丈な建物です。福右衛門が健在であった明治9年の頃、加治木区長をしていた別府晋介は、山田に来たときには福

重家に宿泊することが多かったといわれます。しかし福右衛門は自宅を政府側巡查の宿舎に提供していたという理由で、蒲生の前郷川川尻に



連行され、帖佐の私学校徒で示現流の達人と言われた鳥居八太郎によって殺害されたといわれます。西郷の信頼する別府晋介が同行しながら、なぜ福右衛門を助けられなかったのか不思議でなりません。遺骨はかつて西田墓地の墓にありましたが、現在近くの光楽寺納骨堂に納められ子孫の方が世話をしておられます。

松山町高齢者学級ガイド

坂元 清美

松山町高齢者学級の皆さんが、平成30年11月8日と15日、蒲生八幡神社を訪問されました。2日合計約60名の方が参加されました。担当した8日の様子をお伝えします。



バスで蒲生交流センターに到着された皆さんを拝殿へ誘導し、神社の歴史やクスについて説明しました。そのあと社務所で銅鏡をご覧になり、戦争記念碑群を案内しましたが、このような行事に皆さんとても慣れていらっしゃるようで遅れる方は一人もありませんでした。

途中参加者の女性のお孫さん(転勤で蒲生に居住)が会いに来られて、みんなで“〇〇ちゃんが来た”などと大喜びだったのが印象的でした。

1時間足らずの時間でしたが、皆さん満足気に次の見学地へ向かわれました。

長野・山ヶ野金山を巡る

宮内 伸一

長野^{やまがの}・山ヶ野金山は、寛永17年(1640)宮之城領主島津久通によって発見されたといわれています。横川郷、栗野郷、永野郷の一部を金山の境内として、周囲3里(約12km)に柵を廻らし発掘しました。金結晶「とじ金」が見ついた鉱石がたくさんあり、それを露天掘りしました。集まった鉱夫は約2万人といわれています。(横川史跡案内「黄金の郷 山ヶ野」より)

昭和28年(1953)に閉山になるまで、約300年余り操業し、金の採掘量は約80トン、菱刈金山、佐渡金山に次いで3位に入る生産量です。現在は廃鉱になってしまいましたが、当時の様子を偲ばせる史跡が数多く残っており、毎年3月には「山ヶ野史跡めぐりウォーキング」も実施されています。

今回、横川地区の史跡研修の一環として、山ヶ野金山



文化財保護活用実行委員会の方々に案内していただきました。竹子の第3金山橋を通り、なるべく当時の道路に沿いながら、永野の胡麻目坑跡を訪れました。その後、山ヶ野の島津久通を祀った徳源社^{とくげんしゃ}やとじ山坑跡、搗鉱所跡、御座所・奉行所・山先役宅跡などを訪ねました。草に覆われた山の中に坑道跡や石碑・石垣などが点在し、当時の様子を偲ばせてくれますが、周囲3里のこの山間に1万人を超える人々が生活して



いたとは、とても想像できませんでした。しかしながら、この史跡巡りを通して、金に魅せられた人々の思いや夢の一端に、少しは触れられたのではないかと思うことでした。

※金山名では長野・永野両方が使用されていますが、今回は金山では長野、地名では永野を使用しています。

玉龍中学校2年生加治木ガイド

玉利 良一

平成30年12月1日、鹿児島市立玉龍^{ぎょくりゅう}中学校の2年生とその保護者合計約60名の、龍門滝と龍門司坂のウォーキングの案内を、約20名ずつの3班に別れて実施しました。



龍門滝の謂れが登竜門に繋がることや、大河ドラマ「西郷どん」の撮影が龍門司坂で数回行われ、ガイドのメンバーが西郷どん役の鈴木亮



平さんに声をかけられたことなどを説明すると、興味深そうに聞き入ってくれました。保護者の方からは、同じ字を書きながら片方は「りゅうもん」で、片方は「たつもん」と読むのはなぜかなどの質問がありました。

また、「決意の杉」の前では、それぞれお得意のポーズで記念写真を撮っていました。

若い皆さんが、始良の大きく言えば鹿児島島の歴史に興味を持ってくれれば良いなと思いつつ、昼食予定会場の陶夢ランドへ行く皆さんを見送りました。希望にあふれた皆さんが、それぞれ目指す目標に向かって登竜門を超すことができるよう祈りました。

島津義弘没後 400 年にちなんで 2 題

島津義弘に由来する太鼓踊り

新園 淳一郎

鹿児島県では島津義弘に由来する太鼓踊りは加治木や蒲生及び南九州市の勝目など県内多くの地域で踊られています。特に始良市は島津義弘の終焉の地だけあって、市内各地に太鼓踊りや棒踊りが、夏を代表するお祭りとなっています。

太鼓踊りの起りは、島津義弘が文禄・慶長の役の凱旋記念として、駿河の念仏踊りを参考に家臣に習得させたという説や、慶長の役の泗川の戦いで、味方の軍を多勢に見せるため、多くの旗差し物押し立て、鉦や太鼓を打ち鳴らして明軍を圧倒した様子をもとに創始させたという説などがあります。

加治木の太鼓踊りは、九州各県に見られない特異な太鼓踊りで、中世から地域に根ざした芸能に、念



仏踊りの鉦や朝鮮出兵などの要素が加わり、現在の太鼓に変化

してきたものと考えられています。

始良市内には 8 団体（加治木 4、蒲生 3、始良 1）の保存会があり、精力的に後継者育成や保存伝承に努めていますが、発祥の地と言われる山田では、途絶えています。

加治木の太鼓踊りの際は、義弘が朝鮮での戦いの折、道に迷い二匹のきつねが道案内をしてくれたと言う伝承を踊りにした県の無形民俗文化財となっている吉左右踊りも踊られています。

太鼓踊りは現在、加治木では 8 月 16 日、蒲生では 8 月 21 日に行われています。

義弘と加治木まんじゅう

吉田 茂子

関ヶ原の戦いから帖佐に戻った義弘は平松に移り、翌年には加治木に落ち着き余生を過ごし

ました。

晩年には教育や経済、産業の発展に努め、学識ある者たちを登用し、学術を勧めました。

現在鹿児島県の夏の夜の風物詩として島津家 19 代光久の頃に始まった「六月灯」がありますが、義弘が加治木の館にいた時代に義弘の発案により盆の両夜に仮屋馬場に絵灯籠を掛けるならわしがあったと言われてい

ました。加治木に移る前年、木造の太鼓橋工事が行われ、その大工た



ちにお茶うけに出されたと伝わる饅頭は、郷土菓子「加治木まんじゅう」として手土産に喜ばれています。

この菓子は朱子学を講じた学僧桂庵玄樹によって伝わったとの説がありますが、玄樹は晩年薩摩入りして鹿児島伊敷の東帰庵で過ごしています。その頃に製法などを伝えたものと思われる。

義弘が上下分け隔てなく、この饅頭をお茶うけに供したことにより、一般庶民にも広まり考案された味が今日の経済を潤しています。

最愛なる夫人との逸話、千利休との茶の湯を極めた話等々、義弘の話題は尽きません。

編集後記

「あいらの歴史と物語」第 36 号も平成最後の発行となりました。戦争こそなかったものの自然災害や人災といえる事故などの多かった平成に代わり、新しい時代が安全で安心できる時代となってほしいと祈らずにおれません。

さて、昨年発行された「加治木地区」に続き、「始良市文化財ガイドブック 帖佐・重富地区」が近々発行される予定です。機会がありましたらお求めください。